

西周の現代的意義

小 泉 仰

本論は近代日本でいち早く西洋哲学を学び、日本における西洋哲学の伝統の基礎を築いた西周が、現代日本の思想界に対してどのような意義を持っているかを検討することを目的としている。検討内容としては、第一に明治3年に西が講義した『百学連環』の現代的意義を問うことである。第二に西の言う百学の「連環」となる原理を検討することである。第三に西の構築した功利主義倫理学体系の独自性を検討することである。第四に西周が苦心して作り上げた訳語の現代的意義を検討することである。第五に西の訳出した専門用語と、西の同時代の洋学者たちの訳語とを比較してみることである。

1. 『百学連環』の現代的意義

明治3年に西周が講義した『百学連環』は、現代では統一科学と言い換えられる。西は『百学連環』の由来を、'Εγκύκλιος παιδεία というギリシャ語から来たとしている。これは永見裕の誤記で、'εγκύκλιος παιδεία か、その俗語 'εγκυκλοπαιδεία とすべきである。

その意味は、西周によれば、児童を輪に入れて導き教育するという意味である。西は統一的理念によって百学を関連付け、そうした統一科学的体系を作成した後に、これを明治初年の日本の青年に西洋諸科学を習得させる手段とみなし「浅学の者を導かんと欲する、余が創見に出る処なり¹⁾」と主張し、自分の独創的な見解であると主張した。

但し児童を輪に入れて教育するという発想は、すでにイマヌエル・カントも『純粹理性批判』1781年²⁾で類似の発想を行っていた。カントは、幼い子供の腰に紐を付けて親が子供を歩かせる紐を Leitband 乃至 Leitfaden (導きの紐) と表現した。

カントは『純粹理性批判』がまさに哲学への導きの紐とみなし、研究者に学問的基礎論を把握させようとした。そこで西の百学連環という構想は、完全には西周の創見とは言い難いとしても、日本においてエンサイクロペディアから着想して西洋の自然科学、社会科学、人文科学全体を統合的に捉え、当時の日本人への教育手段としたことは、西の独自の着想であった。

ところでエンサイクロペディアは、その後の日本で、あらゆる分野の言葉・事柄を網羅して百科事典を作る運動となった。その西洋文明の影響下の最初の結実は、明治16年の『百科全書』³⁾の出版に現れ、その後の百科事典の系譜を作り上げた。

他方、西は『百学連環』を自然科学・社会科学・人文科学を総合する哲学として捉えた。それゆえ西の発想は、上記の百科事典とは異なる構想であった。現代的に言えば、統一科学 *unified science* というべきであろう。こうした発想は、現代の高等教育において一般教養という意味を持っている。

他方、西周の生きた 19 世紀では、欧米世界でも学問が次第に専門分化し始めた時代でもあった。もちろん西周が学んだ近代ヨーロッパの一流の研究者ジョン・ロック (1632–1704)、デヴィッド・ヒューム (1711–1776)、オーグスト・コント (1798–1857)、J. S. ミル (1806–1873) らは、哲学、宗教論、政治学・経済学などの多くの研究領域に亘る研究成果を挙げており、その意味で言わば *generalist* (知的学問対象全体の研究者) であった。

他方で、この時代にも次第に学問の専門分化の傾向が次第に現れている。例えば、倫理学の領域で言えば、20 世紀初頭の倫理学者 G. E. ムーアである。ムーアは、最初ケンブリッジ大学で数学を担当したが、後に自分の研究成果を倫理学に限って研究し、一生を倫理学の専門分野に限って研究を続けた。

20 世紀前半から 20 世紀後半に至ると、人文科学・社会科学の領域でも専門分化の傾向が一層激しくなり、一つの領域の研究者は他の領域に無知となっていく傾向が生じてきた。たとえば、20 世紀後半にける学問の極端な専門化に関して、V. R. ポッターは、『バイオエシックス—生存の科学』の中で、次のような問題提起をしている。

専門分野が狭くなればなるほど、本の参考文献は同じ領域の他の人々の読むものと重なり合うようになり、ついにはあまり専門化しすぎて、自分の書いたものしか読まないほど極端になる。⁴⁾

分子生物学者でガン研究者のポッターは、暗々裏に彼もまた参考文献として同じ狭い専門領域の研究者の文献か、自分の書いた研究論文だけを参照していたことを示唆した。こうして学問の専門化が極端にまで進めば、分子生物学の専門家は自分の領域に関して学問の深化を進めることはできるが、自分の専門領域外の生物学の分野には無知で何の貢献もなしえずに孤立化して行き、ついには生命倫理・医学倫理を含んだ生物学の新しい問題に対処できない事態に陥ると考えた。そこで、ポッターは個別分野の生物学の総合化の必要を説いた。それが彼の造語となったバイオエシックス (Bioethics) である。

こうした傾向の大きな運動の一つとして、アメリカのシカゴ大学を中心として *Unified Science* (統一科学) という運動が勃興した。この運動は、20 世紀後半に至るまで *Unified Science* 論集を刊行して、その中で統一科学の重要性を説こうとしてきた。その理由の一つは、専門分化の結果として自然科学・社会科学・人文科学が個別では世界大戦や世界恐慌といった世界的危機に対処できなくなるという危機意識である。

現代で言えば、環境破壊、地球温暖化と言った問題は、生物学者、倫理学者、社会科学

者、法律家、政治学者、政治家、経済学者、経済界の指導者、一般市民が協力し合って初めて問題の解決の糸口を見つけ出せるであろう。こうした科学の発展と有効性のための統一科学運動の日本における先駆けが西周の百学連環運動であり、彼の百学連環はこの点で現代的な意義を持っていると言えよう。

人文社会自然科学を含む学問全体においても事情は同じであり、専門分化と総合化とは、相互に緊張関係をもって対立し合い、相互刺激を加え合い、相互に貢献をし合う必要がある。

西周の百学連環の総合研究と彼の専門分野での特殊研究は、諸科学を総合化し普遍化しようとすると同時に専門科学への論究の両方向を行おうとした近代日本の最初の試みとしての意義を持っている。

2. 西周の「連環」の研究

ところで、「連環」という言葉は、百学を結びつける環、つまり諸科学同士を統一する原理という意味を持っていた。西は「學術の相関渉して要用とするところのミを挙げ⁵⁾」と言い、自然科学・社会科学・人文科学を総合する鍵を発見しようとした。西は百学を連環させる環を学と術、普通学と殊別学、コントの三段階説、J. S. ミルの帰納法、物理と心理の中に見出そうとした⁶⁾。

第一に西は「学と術 (science and art)」について、ウィリアム・ハミルトンが区別した学術⁷⁾を参照し、次のように説明している。理論学としての「学」と「其知る所ノ理ニ循ヒテ之ヲ行フノ上ニ係ハル」術、つまり応用の学とをわけて、学と術との関連を了解しようとした⁸⁾。

第二の環は、普通学 (common science) と殊別学 (particular science) である。普通とは「一理の万事に係はる」⁹⁾ ことであり、殊別とは「唯ター事に関する」ことである。普通学は殊別学全体に通用する理を問題にするから、殊別学の基礎学ないし手段学であり、基礎学の上に殊別学を建設しようとする仕方で、両者を関連させる環とされる。西によれば、普通学とは “History, Geography, Literature, Mathematics” であり、「文事（普通学）は真理を知るという目的を持つ学（殊別学）」の手段となり、また応用学つまり術に対して手段になると言う¹⁰⁾。

第三の環は、オーギュスト・コントの三段階説である。西はコントの三段階説が百学を連環させる鍵と見ていたが、現代の学問全体の視点から見れば、コントが無視しようとした仏教哲学、キリスト教神学、イスラム教神学、カトリック系形而上学を含んだ神学的段階ないし形而上学的段階の諸学問も現代的意義が認められている。そこで、西の考えたようにコントの三段階説を連環の鍵の一つと考えることは難しい。

西が挙げた第四の環は、J. S. ミルの帰納法である。西が指摘したミルの帰納法は、現代に通用する実証科学の基礎的論理の一つであり、西の優れた着目点である。但し西はミルの帰

納法についてどの程度理解していたかは明かではない。西は『百学連環』¹¹⁾でジョン・スチュアート・ミルが System of Logic の中で帰納法論理を発明したと言い、そのため「学域大に改革し、終に盛むるに及（上掲書）」んだと指摘している。

『百学連環』では、西は帰納法論理のうち単純枚举の一致法 (the method of agreement) を挙げ、さらに「陽効表 positive result」と「陰効表 negative result」を掲げて、一致と差違との両方から結論を導出する方法、つまり一致・差違共用法 the joint method of agreement and difference を指摘する。しかしここではミルのこの二方法のみを指摘するに留まっている。

1874年に刊行した明治最初の論理学書『致知啓蒙』で、西は漸く剰余法 the method of residues、共変法 the method of concomitant variation の二つの帰納法を挙げている。しかしその詳細を説明せずに、「学者ソレ之ヲ本書ニ講究セヨ」¹²⁾と逃げている。とはいえ、帰納法が現代の社会科学・自然科学の方法の一つであるから、これを百学の連環の一つとした西の着想自体は、現代的意義を持っていると言って良い。

第五の環は物理と心理である。西はすでにオランダ留学中か帰国直後の作の『開題門』で、「諸を実物に験し、諸を実知に体し、的然の証に徴し、確乎の因に鈎（こう）し、以て天常不易の故に達す」と言い、さらに「百学と相関渉する所以は如何ん、曰く一は気科の成功を萃（あつ）む」とし、さらに「一は理科の大義を啓（ひら）く」¹³⁾と指摘している。この気科と理科との関連について、『開題門：附載文四』¹⁴⁾で、西周は「気科（物理）の成功に因りて理科（心理）の蘊奥を開く」と言い、ここに「百学と相関渉する所以」を見つけようとした。

西は朱子学の「気」を物質的、現象的領域として受け取り、「理」を道理的要素（当然の理）として受け取るが、朱子学とは異なり、西は、自然科学を「気科」と呼び、この自然科学を根柢にして「人間学（ソシオロジ）」「人道教門ノ学（モラルレリジョン）」「治道経済ノ学（ポリテイック）」「綱紀法律ノ学（ロウ）」を含めた人文社会科学の「理科」を基礎付けようとした。こうして西は、コントの発想を借用して、「気科の成功に因りて、理科の蘊奥を開く」¹⁵⁾こと、つまり自然科学を基礎として人文社会科学をその上に築き上げることで、ヒロソヒ（哲学）が完成すると考えた。

西は、明治7年の『百一新論』¹⁶⁾で、気科の法則を物理と称し、理科つまり人文社会科学の法則を心理と表現し、物理と心理を次のように言う。

物理とは「天然自然」のものである。しかも「物質一般ノ理」つまり「総テ百般ノ道理ヲ物理ト云フ」と言い、これを「先天ノ理（アプリオリ）」¹⁷⁾と称している。物理は「人間トイウモノノ出来タ所デ其一般ニ存スル性ト云フモノ」、つまり生物学的生理学的法則（人間にある物理）である。

一方、人間の物理に従って獲得された「後天ノ理（アポストエリオリ）」は、「唯人間ノ心裏ニ存スル理」¹⁸⁾であり、後天ながら天法である。西の現代的意義は、朱子学が理を根柢とし

て気を少なくして無にいたることを求めたのとは全く逆に、実証主義の立場から「気科（物理）」を根拠ないし土台として、その上に「理科（心理）」を築き上げようとした点にある。

こうした物理と心理の区別は、J. S. ミルが『経済学の未決の問題』¹⁹⁾で説明した物理法則 (the laws of matter) と心理法則 (the laws of mind or human nature) に並行している。『百学連関』で、西が参照にした著書には、William Hamilton, *Lectures on Logic and Metaphysics* 1859–1860²⁰⁾ 及び G. H. Lewes, *A Biographical History of Philosophy*, 1857²¹⁾, G. H. Lewes, *Comte's Philosophy of the Sciences*, 1853²²⁾ などもある。

尚、西は明治6年の『生性発蘊』²³⁾ (106–108 頁) で G. H. Lewes, *A Biographical History of Philosophy*, 1857 と、同じくルイスの *Comte's Philosophy of the Sciences*, 1853 中のコントを説明する部分の部分訳をしている。そこで、コントが心理法則を研究する「性理学（サイコロジ）」と、物理法則を研究する学の生理学（フィジオロジ）との間に、前者が主観的方法を取ることを説き、それに対して生理学は客観的方法を採用できることを指摘した。

これに対してルイスは、生理学から性理学つまり心理学へ橋渡する点について、方法論的・学問的に絶縁状態であると指摘した。この点に共鳴した西周も、生理学の客観的観察方法が十九世紀の心理学では通用せず、結局 19 世紀の現状では心理学の領域の研究には内観法 *introspective method* しかないことを悟り、方法論の上で百学の連環の糸が切れたと考えた。

こうして明治6年(1873)以降、西は百学連環の発想を追跡することを止めたのである。明治6年当時の日本の思想界で、西周が生理学と心理学を統一的に使用できる科学方法を探ろうとする視点から百学の連環を見付けようとした着想の鋭さは、明治の指導的な知識人の水準を超えていた。この点で、明治初期においては、西周だけがこの驚くべき哲学的英知を所有していたことになる。

因みにルイスと西周とが待ち望んだ心理学の方法として生理学的客観的方法が採用されたのは、40年後の1910年代の John Broadus Watson が、*Psychology from the Standpoint of Behaviorist*, 1919 において、心理学が内観的方法 *introspective method* に依存する意識心理学を捨てて、客観的に実験的観察による方法を採用した行動心理学 *Behavioral Psychology* を樹立すべきことを提唱したことから始まる。こうした客観的方法を採用することによって、西が生理学から心理学の架け橋を樹立しようと着想したこと自体は、たとえそれが G. H. Lewes の著書から着想を得て、現実にはその着想の実現に到達できなかったとしても、19 世紀日本での彼の学問的英知のずば抜けた視点を示しており、現代に通用する西周の学問的英知の独自性を示している。

3. 西周の倫理学体系における独自性と現代

ところで、20 世紀半ばから後半までの英米倫理学界で、激論が繰り返し行われた論争の一つは、積極的功利主義と消極的功利主義との対立論争であった。

因みに積極的功利主義者は、最大多数の最大幸福を実現することを第一目的とするが、この第一目的を実現しようとするとき、最大幸福の恩恵に浴することのない少数派の幸福が無視されることを含んでいる。言い換えれば、少数派は切り捨てられる。この点が積極的功利主義が批判される所以である。この点を批判する人びとは、万人の苦痛を最小限にすべきだと主張する人びとであり、彼らは、消極的功利主義者と呼ばれている。

他方、もし消極的功利主義者が万人の最小限の損害を第一目的とするなら、不幸が避けがたく存在する現実世界では、最小限の損害を実現するために、原子爆弾か水素爆弾によって苦痛無しに人間全体を一挙に抹消することの方が、消極的功利主義を最大限に実現するであろうと批判が積極的功利主義者から出てくる。

この論争は 20 世紀後半までの英米倫理学界で激しい論争になった。私の見る限り両者は一向に調停されず、結局論争は一時頓挫した状態に陥っている。

ところが、西周は、上記の論争に対して優れた調停策を提案した。その調停策は、明治 7 年 (1874) に『明六雑誌』に公刊した『人世三宝説』²⁴⁾ で彼が展開した功利主義倫理学体系である。西周は、現代の倫理学者が論争した激論を調停する優れた複合的功利主義倫理学体系を提案した。西周のこの種の調停策について、私は、拙著『西周と欧米思想との出会い』²⁵⁾ で指摘したので、詳細はそちらに譲り、西の提案を簡単に述べよう。

西は消極的功利主義原理の実現を必要条件として実現した暁に、十分条件として可能な限り積極的功利主義原理の実現を目指すべきだという二重構造の倫理学体系を提案した。西が消極的功利主義原理の実現の後で、積極的功利主義原理を仮言的命令の形式で要請したことは、当然積極的功利原理を含意している。言い換えれば、消極的功利原理を実現した後で、積極的功利原理を論理的に前提していることになる。

そこで、水素爆弾で一挙に人間全体を抹殺する含意を持つ一種の消極的功利主義原理を排除している。なぜなら、西の仮言命令は積極的功利原理の推進を論理的に含意しているからである。こうした提案は、現代英米倫理学界においても未だ知られていない。この意味で西周の功利主義体系は、現代の倫理学会の論争に対する調停案としての現代的意義があると言えよう。

4. 西周の訳語の現代的意義

第四に西周の訳語の独自性について検討する。西周自身が独自に作った専門用語として自認した用語は、Joseph Haven の訳書『癸般氏心理学』文部省刊²⁶⁾ の序文に見られる。西自身は「理性 reason」「悟性 understanding」「感性 sensibility」「覚性＜感覚＞ sense」「演繹 deduction」「帰納 induction」「観念 idea」「命題 proposition」「主観 subject」「客観 object」「総合 synthesis」「分解＜分析＞ analysis」「实在 being」などの訳語が彼自身が独自に作ったものだとしている。但し＜＞の概念は、現代の哲学用語では修正された形で使用されている概念を示している。上記の西独自の用語は、『癸般氏心理学』より以前に西が使用している

場合もあり、その場合には*印を付すことにする。

最初に明治8年(1875)頃までの西の代表的な著作を(A)(B)(C)順に(L)まで挙げて、それらの著作の中で使用された訳語を以下に挙げてみる。但し年号は西暦年号とする。

西の著作は以下のものである。

- (A) 『開題門』及びその附載文、1863-65 前後²⁷⁾。
- (B) 『百学連環』 1870²⁸⁾。
- (C) 『哲学関係断片』 1873?²⁹⁾。
- (D) 『学原稿本』『五原新範』 1870-1873³⁰⁾。
- (E) 『生性発蘊』 1873³¹⁾。
- (F) 『致知啓蒙』 1874³²⁾。
- (G) 『知説』 1874³³⁾。
- (H) 『百一新論』 1874³⁴⁾。
- (I) 「内地旅行」『明六雑誌 第二十三号』 1874³⁵⁾。
- (J) 『人世三宝説』 1875³⁶⁾。
- (K) 西周訳『奚般氏心理学』文部省刊 1875 年 4 月、1876 年 9 月、1879 年 2 月版³⁷⁾。
- (L) 「幸福ハ性霊上ト形骸上と相合スル上ヘニ成ルノ論」1875、全集 1 巻、555-580 頁³⁸⁾。

以上の著書に関して西周の訳語を列举してみる。但し西の独創的訳語ではあっても、現代の諸科学で使用されていない訳語は紙数の関係で削除した。

- (A) 『開題門 附載文四』：経済法律の学、『開題門 附載文五』：実験 +
- (B) 『百学連環』。但し訳語を次の種類に分けて分類することにする。
 - (B・1) 「人間の機能・作用」。
 - (B・2) 「学術関係用語」。
 - (B・3) 「学問名」。
 - (B・4) 「政治・法律・外交関係用語」。
 - (B・5) 「経済・社会関連用語」
- (B) 『百学連環』
 - (B・1) 「人間の機能・作用」：臆断 prejudice、惑溺 superstition、利用 avail、適用 apply、才力 talent、天賦 gift、天稟 endowments。
 - (B・2) 「学術関係」：総論 introduction、規則 rule、学術 science and arts、定義 definition、真理 truth、技術 mechanical art、芸術 + liberal art、印刷術 + printing、権、権利 + rights、新聞紙 + papers, newspaper、博物館 museum、帰納の法 * induction、演繹の法 * deduction、方法 method、枚举 enumera-

tion、実体 being、存在 existence、関係 relation、命題 * proposition、儀式 ceremony、分数 fraction、積分 integral、微分(学) diferencial、子音 consonants、母音 vowels、散文 prose、量 quantity、句 verse、物質 matter、分子 Molecule、親和力 affinity、重力 gravity、圧力 pressure、実体 substance、根元 origin、摩擦 mechanical Friction、鉱物 metal。

(B・3)「学問名」：地理学 + geography、動物学 + zoological、造化史 natural history、編年史 chronicle、年代記 annals、伝 biography、年表 chronology、小説 fable、万国史 universal history、中世史 middle history、文辞学 rhetoric、語原学(語源学) philology、音声学 phonology、数学 mathematics、天文学 astronomy +、哲学 * philosophy、性理学 psychology、生理学 + physiology、法学 science of law。

(B・4)「政治法律外交関係用語」：政事 +、法律 politics & law +、君主政治 monarchy、政権 + power、内閣 Cabinet、上院、下院、選挙の法、宰相 ministers、刑法 + criminal cause、証人 witness、死刑 capital punishment、共和政治 constitutional republic +、政府 + government、万国公法 + International law、物件 + property、私権 droit prive、公権 + droit publique、刑法 + droitcriminel、州法 loi provinciale、立法ノ権 <立法権> legislative、行法ノ権 <行政権> executive、兵役法 loi de militia、権利 + rights、戦時 warfare、休兵条約 armistice、通行票 passports、同盟 alliance、講和 negotiation。

(B・5)「経済・社会関連」：農業 agriculture、貿易 <商業・通商・貿易> commerce、快楽 pleasant、船荷 cargo、年貢 revenue、運上 custom、均一 equality、消費 consumption、専売 <独占・専売> monopoly、人口 Population、医術 + medicine、伝染病 epidemic、外科 surgery。

以上『百学連関』には、『奚般氏心理学』(1875)に見られる西の訳語「演繹 deduction」「帰納 induction」「命題 proposition」は、すでに使用されている。

(C)『哲学関係断片』明治6年前後？

「人間の機能・作用」：感性 sensibility *、覚性 sense *、衝動 impulse、触覚 touch、理性 reason *、意識 consciousness、知覚 perception +。

ここに『奚般氏心理学』で使用された関係、理性、意識などが使用されている。

(D)『学原稿本』『五原新範』

定義、実際致知 logique pratique、命題 * proposition、断言 conclusion、外延 exten-

sion、内包 comprehension、intention、定義 definition、思量 consideration、定言 as-
sertion。

(E) 『生性発蘊』 1873

(E・1) 「人間の機能・作用」：意識 + Bewusstsein、consciousness、感覚 + sensation、性質 property、吸収 absorption、滋養 nutrition、消化 digestion、呼吸 aspiration、細胞 cell、分泌 secretion、触覚 sensuality、感覚 sensation、知覚 + perception、選択 choice、驕傲 pride、智識 +、本能 instincts、心意 mind、理性 * reason、行動 locomotion、motion、自愛性 egoism、他愛性 altruism、畏敬 veneration、仁愛 benevolence、想像 + imagination、動機 motive、生活 life、思慮 + thought、delivation。

(E・2) 「哲学関連」：綜合法 * synthetical、分解法 * analytical、定義 definition、省察 reflection、帰納 * induction、概括力 generation、演繹 * deduction、反動 reaction、觀念 * idea、存在 beings、事象 event、哲学 *。

(E・3) 「学問名」：物理学 + physical science、幾何学 + geometry、機械学 + mechanic、天文学 + astronomy、動物学 + zoology、生理解剖学 physiological anatomy、史学 history。

(F) 『致知啓蒙』 1874

「哲学・論理学関係」：哲学 philosophy、直覚 intuition、後天 a posteriori、記号 sign、思量 consideration、思惟 + contemplation、肯定 affirmation、実体 substance、綜合法 * synthesis、類 genus、演繹 * deduction、帰納 * induction、外延 extension、内包 comprehension、intension、全称 universal、特称 particular、同一 identity、理性 * reason、対偶転換 conversion by contraposition、包摂 subsumption、一致 agreement。

(G) 『知説』 1874

度量 < 量 > quantity、形質 < 質 > quality。

(H) 『百一新論』 1874。

伝染病 epidemic *、先天ノ理 apriori、後天ノ理 a posteriori、所有ノ権、権義、獨知 *、物理 *、心理 *、哲学。

(I) 「内地旅行」『明六雑誌』 第二十三号

分析、演繹法ノ分析。

(J) 「人世三宝説」 1875。福祉 +。

(K) 西周訳『奚般氏心理学』

(K・1) 「人間の機能・作用用語」：直覚力 intuitive power、覚性 sense、感覚 sensation、感動 feeling、機官 organism、触覚 touch、視ルノ官 vision、聴クノ官 hearing、嗅 smell、認識力 cognitive power、創造力 creative faculty、記性

memory、想像力 imagination、直覚力 intuitive power、本能 instinct、情緒 emotion、情欲 affections、愉快 cheerful、悲哀 grief、驕傲 pride、享樂 enjoyment、歡喜 happiness、憂悶 sorrow、驕慢 pride、虚傲、不格好 incongruous、諧謔 wit、冷語 sarcasm、驚愕 surprise、厭惡 ennui、適意 satisfaction、驚嘆 admiration、獨知 conscience、悔恨 remorse、善意 benevolence、惡意 malvolent、親愛・友情 friendship、感謝 gratitude、愛国ノ情 patriotic emotion、傷害 injury、嫉妬 jealousy、報復 revenge、過失 abuse。

(K・2) 学術関係：伴生ノ理法 laws of association、現実的 actual、理想的 ideal、関係 relation、抽象 abstract、綜合法 synthesis、分解法 analysis、一般概念 general concept、類似 resemblance、命題 proposition、図 figure、時間 time、空間 space、実体 substance、社会 society、人種 race。

(L) 「幸福ハ性靈上ト形骸上と相合スル上ヘニ成ルノ論」：政治＋、法律＋、幸福＋。

以上の訳語を概観すれば、『癸般氏心理学』で西自身が造語したと主張した「理性 reason」「悟性 understanding」「感性 sensibility」「覚性＜感覚＞ sense」「演繹 deduction」「帰納 induction」「観念 idea」「命題 proposition」「主観 subject」「客観 object」「総合 synthesis」「分解＜分析＞ analysis」「實在 being」は、西独自の訳語であると共に、現在でも使用されている用語も多いことが判る。しかし『癸般氏心理学』が出版された以前の西の著書に、すでに使用されている用語もある。

しかし法律・政治関係の用語に関しては、津田真道と一緒に『性法万国公法国法制産学政表口訣』³⁹⁾を執筆した経験から両者は協議しながら造語していたと考えられる。

5. 西周と同時代の洋学者たちの訳語の列举と比較

そこで西周と交友があったと考えられる洋学者たちの作品の中で、『百学連環』が講義された1870年までに公刊された著書について検討し、彼らがどのような訳語を使用していたかを検討してみよう。さらに明治6年に至るまでの西周と同時代の洋学者たちの用語リストと比較してみて、西周の用語と他の洋学者の用語とが重なる場合に、＋を付する。西と同時代人の洋学者のどちらが先に訳語を作り出したかは必ずしも決定できないとしても、共通に使用していたという意味での＋印である。

ここで取り上げる洋学者は、(1) 福沢諭吉、(2) 中村敬宇、(3) 津田真道、(4) 森有礼、(5) 加藤弘之である。彼らの用語で『百学連環』に見出される用語と同じ語には、『百学連環』リストと他の洋学者の著作リストの両方に＋印を付しておく。資料は以下の通りである。

『福沢諭吉全集 第一巻』⁴⁰⁾。

大久保利謙編『明治啓蒙思想集』⁴¹⁾。

中村敬宇『請質所聞』国会図書館分院静嘉堂文庫⁴²⁾。

大久保利謙、桑原伸介、川崎勝編『津田真道全集 上』⁴³⁾。

『明治文化全集 雑誌篇 第五卷』⁴⁴⁾、『明治文化全集 教育篇』⁴⁵⁾。

(1) 福沢諭吉『西洋事情』(1866) 実験の説+、経済、天文学+、政治+、貴族合議 Aristocracy、共和政治 Republic、政体+、政府+。

(2) 中村敬宇：「留学奉願候存寄書」1866、279 頁⁴⁶⁾：政事学+、論理の学、文法の学、人倫の学、律法の学、万物究理の学、工匠機械の学、天文地理の学。

中村敬宇『請質所聞』1869⁴⁷⁾：算術+、化学+、蒸気機関、想像+。

中村敬宇：『西国立志編序跋文集』明治 3-4 (1870-1871)、283-286 頁⁴⁸⁾：「自助論第一編序」自主之権、知識+、学問文芸、福祉+、地球、刑罰、宇宙。

中村敬宇：「自助論第二編叙」公益：「自助論第四編序」理学名家。

「自助論第九編序」智識+。

(3) 津田真道：「性理論」⁴⁹⁾ 1861：宇宙、知覚+、記憶+、思慮+、道理、教養、教育。

津田真道『天外独語』⁵⁰⁾ 1861：枢軸、+ 臆説、合衆国、+ 歴史、兵制改革、実用地理学、倫理学、法律学、動植二学、音楽の学、地殻学、求聖学（ヒイロソヒー）。

津田真道「五科学習に関するフィッセリングの覚書」⁵¹⁾ 1863：+ 法律、経済学。

津田真道「泰西法学要領」⁵²⁾ 1866 法学、羅馬の法学、自立自主の理、+ 義 obligation、+ 権 Verbindlichkeit、司法院、人道（モラル）、万国公法+、国法+、刑律、私法+、商法+、民法+、性法+、慣習法+、司法+、刑法+、法律の学、法科、医科、司法院、不文律法、刑律、成文律法、主権、制法、制令、理財、自主民、国民、平民政治、盟邦、国政、法制、政府+、宰相、財政、法学。

津田真道『泰西国法論』⁵³⁾ 1866、国家、住民、人民の権利、盟約、列国公法、公権、政令、理財、經理、首長、誓約、公益、国民、政体+、国権、律法、税法、人権、物権、約束、軍法、刑罰、犯人、自主民、不自主民、外国人、国法論、帰化、請願の権、自由、多頭政治、一頭政治、平民政治、民主の国、大衆愚民の暴政 (ochlocracy)、豪族政治 Aristocracy、二三家政治 oligarchy、一族政治 Nepotism、平民政治、治安条規 pragmatic sanction、国制、建国の法制、政府、報告 report、会計局、権威、立国、法律制定、憲法、討論、無罪、有罪、知覚+、貴族 nobility、平民 commons、請願、所有、表紀 statistics、産業、生涯年金、記述学、地理、経済学、動産、不動産、資本、利息、区役所、国庫、国債。

津田真道『ウイリアム・ヘンネ 日本行記』電信機テレグラフ 写真機、病院、英語、海軍惣督（総督）、全権宰相。

(4) 森有礼『航魯紀行』1867⁵⁴⁾：宗教。

(5) 加藤弘之「プルンチュリ氏国法汎論摘訳・民選議院不可立ノ論」⁵⁵⁾ 1874：国法+、政令、立憲。

以下、同時代の雑誌類に掲載された関連用語リストを列举してみよう。

柳川春三発行『西洋雑誌』⁵⁶⁾ (1867年10月-1870)：学術+、金属、合衆国、分析術。

医家、『西洋雑誌 卷三』1868⁵⁷⁾：太陽暦 大統領、神田孝平述、鉄道、株主、蒸気機関。

『西洋雑誌 卷六』⁵⁸⁾ 大公国、格致学、医学、理学。

山東一郎刊行 1869：『新塾雑誌』 第二号：芸術+、印刷、保険 Insurance (支那訳)、試験+。

柳川噉『西洋雑誌』⁵⁹⁾ 3-26 頁、1867. 10 学術+、化学+、医学、理学。

細川習撰『和蘭学制』⁶⁰⁾ 1869、：算術+、理学、化学+、植物学、動物学+、英語、経済学+、独逸語、地理学+、歴史+、地理学+、植物学+、農業、高等代数学、金属学、微分積分、水利学、器械学+、建築学、造船学、実用究理学、商法+、鉱山学、分析法、数理、究理、政治学、数理学、天文学+。

小幡篤次郎撮訳『西洋・学校軌範』⁶¹⁾ 1870、39-59 頁、：地理、天文、医術、器械術、裁判、政事科、宗教、数学+、歴史；、地理学+、生理学+、文典、歴史+、文論学、理学、語学、法律学校、人道学、人性学、人倫論、化学、究理学、天文学、解剖学、生理学、産科学、薬剂学、治療学、植物学、診療学、代数学、数学+、測量学、英語学、明論学 logic、機械学、地質学+。

以上、西周の『百学連環』以前乃至同時代に作られた他の洋学者たちの訳語リストを掲載してみた。但しこれらの洋学者は西周と交流があると見られる人々である。しかも特定人と特定雑誌に限られているから、十分なりリストではないが、以上の訳語リストだけを見ても、特に法律、経済、政治関連用語では、西の訳語と重複するものがあるが、哲学用語乃至論理学用語に関しては、西周自身が独自に造語した用語が多いことが判る。

これらの哲学・論理学用語は、1875 年から 1876 年に西が訳出した『奚般氏心理学』文部省刊行で公刊された時に確定したと言えよう。

西周の訳語作業以来 125 年に亘って、日本の哲学界は、意味内容を異にして使用する場合が多いとはいえ、一般に西周の訳語を踏襲してきた。それゆえ、西の哲学分野の翻訳語は、先駆的な独自性を示していると考えてもよいであろう。

註

- 1) 『百学連環』『西周全集 四卷』宗高書房、1981 年 11-274 頁；44 頁。以下『西周全集』を全集 1、2、3、4 と略記する。
- 2) Immanuel Kant, *Immanuel Kant's Kritik der Reinen Vernunft*, Herausgegeben von Benno Erdmann, Sechste Revidierte Auflage (Walter de Gruyter & Co., 1919, 20). 天野貞祐氏訳「アンヨ紐」。

- 3) 『百科全書』16 巻、文部省刊、1883 年。
- 4) Van Rensselaer Potter, *Bioethics, Bridge to the Future*, Prentice Hall, 1971, 6-7 (V. R. ポッター『バイオエシックス——生存の科学』、今堀和友・小泉仰・斎藤信彦共訳、ダイヤモンド社、1974 年)。
- 5) 『百学連環』11 頁。
- 6) 上掲書 11-37 頁。
- 7) William Hamilton, *Lectures on Metaphysics and Logic*, Vol. 1, (London: William Blackwood and Sons, London, 1859-60), 6-12, 20-62 and 113-118.
- 8) 『百学連環』全集 4、13 頁、35 頁。
- 9) 上掲書、35 頁。
- 10) 上掲書、73 頁、18-19 頁。
- 11) 上掲書、23-25 頁。
- 12) 『致知啓蒙』全集 1、450 頁。
- 13) 『開題門』全集 1、19-24 頁。
- 14) 『生性発蘊』全集 1、60 頁。
- 15) 『開題門四』全集 1、23 頁。
- 16) 『百一新論』全集 1、277-278 頁。
- 17) 上掲書、281 頁。
- 18) 上掲書、278-280 頁。
- 19) J. S. Mill, *Essays on Unsettled Questions of Political Economy*, (London: Longmans, 1877), 128.
- 20) William Hamilton, *Lectures on Logic and Metaphysics*, Vol. 1 & Vol. 2, 1859-1860, (London: William Blackwood and Sons, 1870-1874).
- 21) G. H. Lewes, *A Biographical History of Philosophy*, 1857, (Longmans, Green, and Co., 1871).
- 22) G. H. Lewes, *Comte's Philosophy of the Sciences*, (London: George Bell and Sons, 1897).
- 23) 『生性発蘊』全集 1、106-108 頁。
- 24) 『人世三宝説』全集 1、514-554 頁。
- 25) 小泉仰『西周と欧米思想との出会い』三嶺書房、1989 年 7 月。
- 26) Joseph Haven, *Mental Philosophy, including Intellect, Sensibilities and Will*, 1857 の 1869 年版の訳書『奚般氏心理学』文部省刊。
- 27) 『開題門』及びその附載文 1863-65 年前後、全集 1。
- 28) 『百学連環』全集 4。
- 29) 『哲学関係断片』全集 1、1873?、173-224 頁。
- 30) 『学原稿本』『五原新範』全集 1、1870-1873 年。
- 31) 『生性発蘊』全集 1。
- 32) 『致知啓蒙』全集 1、1874 年。
- 33) 『知説』全集 1、1874 年。
- 34) 『百一新論』全集 1。
- 35) 『内地旅行』『明六雑誌第 23 号』『明治文化全集雑誌編第三巻』日本評論社、1968 年。
- 36) 『人世三宝説』全集 1、1875 年。
- 37) 『奚般氏心理学』文部省刊。
- 38) 『幸福ハ性靈上ト形骸ト相合スル上ヘノ成ルノの論』全集 1、1875 年。
- 39) 『性法万国公法法国法制産学政表口訣』大久保利謙、桑原伸介、川崎勝編『津田真道全集 上』み

すず書房、2001 年 8 月、89-90 頁。

- 40) 福沢諭吉『西洋事情初編～外編』1866-1867、『福沢諭吉全集 1』岩波書店、1958 年 11 月、275-608 頁。
- 41) 大久保利謙編『明治啓蒙思想集』筑摩書房、1967 年。
- 42) 中村敬宇『請質所聞』1869、国会図書館分院静嘉堂文庫所蔵。
- 43) 津田真道「性理論」1861、『泰西国法論』、大久保利謙、桑原伸介、川崎勝編『津田真道全集 上』みすず書房、2001 年。
- 44) 『明治文化全集 雑誌編 第五卷』日本評論社、1967 年。
- 45) 『明治文化全集 教育篇 第十八卷』日本評論社、1967 年。
- 46) 中村敬宇「留学奉願候存寄書」大久保利謙編『明治啓蒙思想集』筑摩書房、1967 年。
- 47) 中村敬宇『請質所聞』
- 48) 大久保利謙編『明治啓蒙思想集』。
- 49) 大久保利謙他編『津田真道全集 上』。
- 50) 上掲書。
- 51) 上掲書。
- 52) 上掲書。
- 53) 上掲書。
- 54) 大久保利謙編『明治啓蒙思想集』。
- 55) 『明治文化全集 雑誌編 第五卷』。
- 56) 上掲書。
- 57) 上掲書。
- 58) 上掲書。
- 59) 上掲書。
- 60) 細川習撰『和蘭学制』1869、『明治文化全集二卷教育編』日本評論社、1967 年。
- 61) 小幡篤次郎撮訳『西洋・学校軌範』1870、『明治文化全集二卷教育編』日本評論社、39-59 頁。